追加説明資料

資料２－５

総務省統計局

令和７年国勢調査の結果を用いたシミュレーションの結果について

第 158 回人口・社会統計部会においては、令和２年国勢調査の結果を用いたシミュレーションに基づき、層５（外国人世帯が一定数以上いる調査区。当該層から抽出された調査区は「全数調査区」として、全世帯を調査対象とする。）の基準や調査対象となる調査区数、精度検証の状況について御説明したところ。今般、令和７年国勢調査の結果を用いて、層５の基準や調査対象となる調査区数についてのシミュレーションを行ったので報告する。
（基準の考え方などについては、第 158 回部会資料２－４の１(c)を参照）

１．シミュレーションの結果

把握の目安とする外国人比率は、日本における外国人比率 2.93%（令和７年国勢調査結果）に対し、外国人の有効回答率を考慮し、3.78%とすることとした。

令和７年国勢調査の結果をその条件に当てはめると、層５の基準を「外国人世帯数が 14 以上」として設定し、層５からの抽出調査区数を約 850 として、全体の調査区数を約３万 2,000 と設定することで、外国人比率を 3.73%として把握できる計算となる。

なお、令和２年国勢調査によるシミュレーション結果と比べると、層５の基準は「外国人世帯数が 10 以上」から「外国人世帯数が 14 以上」に変更、層５からの抽出調査区数は約 800 から約 850 に増加、全体の調査区数は約３万 2,000 調査区のまま（厳密には 100 調査区程度の減）、把握外国人比率は 1.14 ポイントの上昇となった。

（参考）

シミュレーション結果の比較（令和２年国勢調査、令和７年国勢調査）

	把握外国人比率	層５の基準 （外国人世帯数）	調査対象 調査区数	うち層５
令和２年国勢調査結果ベース	2.59%	10世帯以上	約32,000	約800
令和７年国勢調査結果ベース	3.73%	14世帯以上	約32,000	約850

２．精度に関する検証

調査結果全体の精度については、令和７年国勢調査の「15 歳以上人口」を前回調査及び今回調査の標本設計の方法でそれぞれ調査したと仮定した場合の標準誤差率を計算したところ、今回調査の誤差率は前回調査の 1.03 倍となった。令和２年国勢調査の「15 歳以上人口」を使用して同様の計算を行った場合（1.02 倍）とほぼ変わらない結果となり、前回の試算（令和２年国勢調査の「就業者数」を使用した試算）と同様、調査として一定の精度を確保できているものと判断した。

また、外国人に係る統計精度についても検証を行った。「15 歳以上外国人人口」について令和７年国勢調査を用いて同様の計算を行ったところ、今回調査の誤差率は前回調査の 0.81 倍となった。令和２年国勢調査で行った結果（0.87 倍）と同様、今回の標本設計が外国人に係る統計精度の向上に資することを確認した。

３．結論

上記のとおり令和７年国勢調査によるシミュレーションの結果、層５の基準に変更は生じるものの、調査区数への影響は若干であり、結果精度についても令和２年国勢調査による場合と変わらない結果が得られた。

今回の調査設計は、調査全体の精度を確保しながら、外国人を確実に把握することで外国人に係る統計表の精度の確保を行うとともに、地方事務の負担軽減にも資することができるものである。

なお、令和７年国勢調査結果によるシミュレーションを踏まえた調査区数など標本設計上での変更について、調査計画案の内容に変更が生ずる点はないことを申し添える。